ランドスケープの歴史と町づくり（00・11・25）

近藤公夫（昭24・理一修）

はじめに

只今ご紹介頂きました近藤公夫でございます。今日は「にわ」の文化と町づくりをテーマに話をさせて頂くお招きで八幡塾に参りました。

私は旧制高校最後の入学生として昭和二三年に三高へ入学しましたが、戦後の学制改革で旧制高校が廃校になったため、翌昭和二四年に一年を終了すると新制大学の入試を受けて京大に入学しました。卒業後、農学部の造園学講座で延べ十数年、奈良女子大の家政学部住居学科で二五年、それから神戸芸術工科大学で十数年ばかり、ランドスケープ・デザインという分野で好きに活動してまいりました。自身は生まれてから七十何年か京都に住んでいまして、初め三〇年は銀閣寺の近くに居ましたから小学校から大学まで三高の近くを歩いて通学。その一方、山中越えをこえて琵琶湖で遊んだり泳いだりしましたから、私

にとって近江はファミリアーな所であります。と同時に三高入学前に、同校卒業生の父や兄から「琵琶湖周航の歌」を教わりました。歌の中にある風景を私なりにイメージして、それが私の原風景になり、デザインのイメージにも結びついた思い出も浮かんで来ます。

さて、造園学講座で勉強したと申しました。造園と言えば誰でも日本庭園とか児童公園にイメージされる都市公園や広場を考えますけれども、私は幸運にも昭和三七年、三三歳になった春、当時としては海外活動の草分けとしてパキスタン新首都の都市計画、公園緑地構想、を指導するために出向し、スケールの大きいプロジェクトを経験しました。印象の一つはインド大陸に見られる大自然と較べて、同じアジアと言いながら日本の風景は如何にこまやかなものであるか。そして過去何千年か我々の先人達はこの島国を如何にいつくしみ、国作りの努力を積み重ねてきたか。その歴史文化の結晶とも言える国土に生活し、その風景をエンジョイできる幸福こそ日本のランドスケープを考える原点ではないか、と思いながら今日に至ったわけです。

日本へ帰って奈良女子大へ移りましたが、そこでは国立文化財研究所との共同研究として、史跡や遺構などの環境整備から歴史文化公園の計画などの機会に恵まれまして、日本の歴史文化をイメージしたランドスケープのデザインも学習しました。何しろ、その道の大家からエッセンスを聞かせてもらいながらの設計ですから、労せずして学ばせて頂けた

のです。ただし、お分かりのようにこの勉強は考古学的な分野も歴史地理学的な分野も耳学問。庭師と言えばお庭番と言う言葉があるように、目と耳で他人様の情報を仕入れてプロジェクトに展開するのが職能の一部でもある訳。これからの話はその辺りの限界を判断して頂き、少しでも町づくりのヒントを見いだして下されば、幸いに思います。

縄文時代日本のランドスケープ

海外で得た日本のランドスケープに関する思い、歴史的な風土や文化から匂う景観・環境にこめられた先人の蓄積、それ等は日本の歴史を重ねた村や町に今も見られます。ところが近代の工業文化を基礎に発達した二〇世紀の都市を見ますと、過去の英知とでも言えるものは省みられずに、欧米のいわゆる先進国の先例を手本にしてスクラップ・アンド・ビルドの開発が先行。都市計画も機能中心のグローバリゼーションを中核として、主人公であるべき人間の多様な生活とのバランスに狂いを生み出しているようです。確かに二〇世紀は曲がりなりにやれたけれど二一世紀にこれがつなげるのか。それを考えるヒントを求め日本の先史時代から都市についての風景をたどります。

日本の都市的な遺構を求めて歴史をさかのぼりますと、先ず注目したいのは青森の三内丸山縄文遺跡、紀元前三五世紀から紀元前二〇世紀にかけて繁栄したと言われる所です。

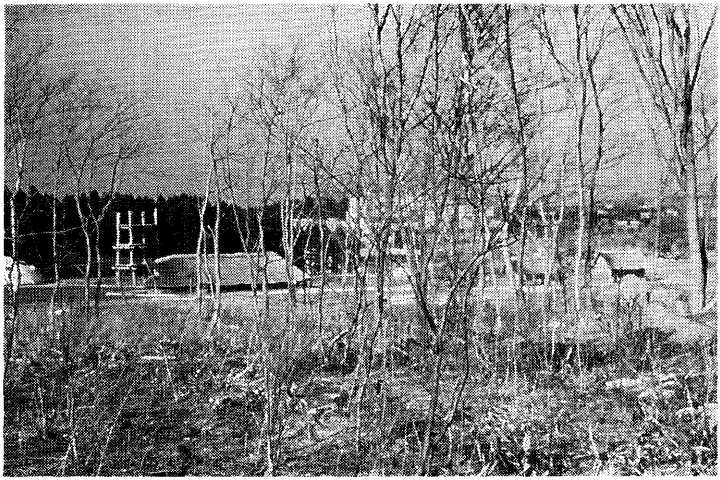

図１　三内丸山遺跡（青森県）

紀元前35世紀から紀元前20世紀に至る縄文時代集落。左上に６本柱構造物と大型建築物屋根，中央上の樹間に高床建築物が列状に配置される。

建築物群の手前は広場，右上は青森湾に連なる。

事実、この遺跡から出土した遺物によりまして従来の縄文文化に関する見方、「縄文人は毛皮を着た原始人で貝を拾ったり小動物を捕らえたりした穴居生活者だった。」「大人数が定住するのは不可能だったから社会生活も発達しなかった」など、衣食住の古い文化観は一変しました。

江戸時代から桜の名所と言われ時に奇妙な土器が出土して話題となった丸山の岡が、運動公園の改良を目的にした事前の発掘調査により、百をこえる住居跡に加え建築面積が百坪に近い巨大建築も出土する、都市と言

えるような集落跡であると判明したのです。何故そのような大集落ができ、巨大建築を誇るような文化が本州の北端に生まれたのか。今では周知の話になっていますが出土した遺物の中には、北陸で産出される翡翠がある一方、北海道の日高地方に見られる黒曜石があり、しかもそれぞれ装身具や刃物に加工中のものまで発見されたのです。ここで三内丸山の立地を見ると青森湾に注ぐ沖館川の河口から数キロさかのぼった所。縄文海侵により海水の水位が高かった当時は海岸に近く、河口から少し入れば岡の裾に舟をつけるのも容易ですし、津軽海峡をこえた彼方には函館山も見える所です。サンナイと言う地名も出水のある沢を意味すると聞きますから、そこは北海道の産物と東北・北陸の産物を舟運によって交易する三次産業の拠点であり、さらには石器などを加工する二次産業の集落としても、この丘陵に道路の建設などをふくむ都市的な環境が整備されたのではないか。

さらに出土した植物の遺体から知られているのは、紀元前四〇世紀に丘陵はミズナラの森だったものがタンポポの草原にクリが植栽された岡に変わり、紀元前二〇世紀頃から後は再びミズナラやブナの林になった経過。その中にもクリは果実の生産や木材の利用を意図して人工的に栽培されていた事実です。同時に食糧としてヒエ・ムギが栽培された他、クルミも重要な資源であり、ブドウの類から酒を醸造したらしい。ウリの類も食膳をにぎわしたらしいと言われます。骨器には釣り針なども出土し、大鯛を見事に調理した遺物か

らは進んだ料理の技術もあった。前後しますが、装身具などに見られた工芸については、無数の人形型土器が赤漆や黒漆で塗装されたもの、ジャパンと言えば漆ですが、重ね塗り仕上げをした赤漆木杯も出土して祭祀の用に供されたのかと推測されています。また蔓で編み漆で仕上げた小物入れのポシェットも、中に二粒のクルミが入ったまゝ発見されたりして、今後さらにどのような知見が加わるか待たれています。

このように見ると当時の縄文人は米作を除いて、弥生時代や古墳時代の先人達と大差ない日常生活を送っていたように思えますが、そのような文化を誇っていた縄文人は、三内丸山の町づくりに、ランドスケープの問題をどのように考えていたのでしょうか。

彼等の集落が本州と北海道との交易を基盤としていたとすれば、その港は海上から見て目立つように、訪れる人達に印象的なように演出された筈です。その演出と思われるひとつは集落の中心にある高さ一五メートル以上もの六本柱構造物、諏訪の御柱のようなトーテムポール的立柱群と言う説、出雲大社のような巨大高楼をイメージする説が対立している遺構です。実際には直径一メートル前後の円柱根跡が三本二列（計六本）芯々間隔四・二メートルで出土し、中央の二本は柱根の深さが二メートル近くに達しており、高さ二〇メートル近い柱が建てられたかと、縄文文化の空想の夢がふくらむ所でもあります。

考古学者の多くは祭祀に中心となる神祠的な機能を考え、故司馬遼太郎氏は海上交通を

意識して燈台的な機能もあり得ようと書きました。何れにしても、九州の弥生時代遺跡である吉野ヶ里は深さ一メートルの柱穴を高さ一〇メートルの望楼跡としている事例から考え、これを上回る大構造物は三内丸山の交易物資を集散する舟運の目標としても機能した。現在は柱のクリをウクライナに求めてシンボルとして復元したものが現地にありますが、市民の中には、「港に運ばれて来た二〇メートルの栗材を見た時の印象の方が強かった、出来上がると中層アパート並のスケール感しかない」、と言う声も聞かれます。

そして現地でいま最も迫力のある復元建築は六本柱に並ぶ巨大建築で、楕円形をした平面の長軸は三〇メートル弱、短軸は一五メートルほど、棟高は一〇メートルに近い。床面は地下一メートル強も掘り下げられ、出土した遺物から見ると三内丸山の人達は冬に集まって炉のまわりで会合したり、集団で工芸をしたりしたように想像されます。また建築に続いて高倉と思われる数棟の高床建築群跡が発見されています。これらの建築は柱の間隔などに一定のスケールが見られ、そのスケール約三五センチを縄文尺と想定する考古学者（岡田文化庁技官）もいます。これからすると前述しました六本柱構造物は一二尺間隔の柱をもっていたという結論になります。

さて以上の建築群がどのように配置され集落景観を形成していたか。従来、縄文時代集落については環状の住居配置が指摘されているのですが、三内丸山では中心部の建築が列

状に平行配置されています。その軸線は北東・南西に、つまり夏至の日出と冬至の日没を意識させる方向になる。周囲の風景からすると偶然でしょうが浄土と言われる恐山と津軽富士の岩木山を結ぶ線に近い。各建築の南面には初夏も雪を残す八甲田山が見えて、もしも六本柱構造物が神祠であれば、それが八甲田山と対面するのには縄文人の精神文化にむすびつく意味があったのでしょうか。

この一群の建築に続いて六本柱構造物を仰ぐような所が広場になりますが、その広場の南外れにある谷の斜面は厚さ数メートルもの人形土器の堆積となっています。それ等は六本柱の神祠に土器を奉納するような祭祀が広場で行われ、祭祀の後、土器は広場の外れに埋められたと思わせます。先に申しました漆の大杯も大鯛の切り身も、六本柱構造物の背後に当たる凹地から出土したのですから、この一帯が祭祀のための聖域だったと考えても不自然ではないでしょう。そのようなセレモニーの場にふさわしい雰囲気の演出を考えると、時代も場所も異なりますが、アテネの神殿とアゴラを一つに圧縮したような場が演出されたのではないか、勝手な想像をしたくなる所です。

先に青森湾から沖館川をさかのぼった交易の舟は岡の裾に接岸したろうと申しました。事実、この丘陵の先端に近い沢からは後世の古代水田遺構も出土していますが、そこから岡の尾根へ登り、祭祀の広場？へ向かう幅員一二メートルもの道が延長五百メートル近く

も発見されております。このような道は別の方向にも分岐していますが、共に道路に沿って環状列石を持った円墳の遺構が列状に整備されている上に、その石質は三内丸山周辺のものではないと言います。三内丸山と交易・交流した各地の豪族が、祭祀の都であった此処に墓所を求め、その故郷の石によって墓地を整備し、祭祀の儀式が行われる機会には物産の交易とあわせて祖先の供養も行ったのではないか、なども想像されます。

このように考えると三内丸山は交易の港市であったと同時に、祭祀などを通じて北東日本の縄文人達が交流する情報文化の巷でもあったのでしょうか。遠くから海路をたどり、青森湾に入った彼等は六本柱構造物をシンボルとする風景に接し、さらに上陸しては目前に展開する建築群のパノラマを眺めながら大道を歩き、数百人をこえる群衆がどよめく広場に息をのんだかと思われます。また三内丸山の中枢をとりまいて一〇戸、二〇戸の集落群を一帯に展開していた住民達は、交易・交流の盛大をはかって集落景観の整備に余念なかったでしょう。そして整備の構想は夏至と冬至の太陽軸からも考えられる、自然崇拝の雰囲気をもって祭祀など行事にふさわしいランドスケープのデザインであり、墓地を訪れる人々の祖先崇拝を高めるような演出の数々ではなかったか。

我々の祖先、エジプトにピラミッドが築かれた当時の縄文人は、ランドスケープのデザインを基調とする町づくり、生活環境整備に自然界との関係を念頭においたアーキテクト

だったのではないか、と先ず申し上げたかった次第であります。

弥生時代日本のランドスケープ

次に千年以上の時間が流れて西方世界にはアッシリアやバビロニアの興亡があり、東アジアには江南・中原に夏や商の王朝が盛衰し、日本列島には水田稲作の文化が流入して、いわゆる弥生時代を迎えます。最近まで弥生時代は紀元前三世紀に始まるとされ、義務教育の教科書も日本文化の開花に後進性を指摘していましたが、早くから大阪の茨木市では紀元前六世紀の水田遺構が発見されていました。また紀元前一〇世紀より古い米作の出土もあって、縄文時代の認識が改められたのと同様、弥生時代の起源は紀元前七世紀以前になるとの教育が始まるらしいです。奈良女子大学の家政学部で生活史の話をし、米食の歴史は高校の教科書に書いてあるより古いと言って、高校家庭科の先生になる卵達から文句を喰った思い出があります。しかし、時代の人口動態から考えても稲作の歴史は紀元前一〇世紀前後までさかのぼり、農業を基盤とする日本文化の成熟は古い筈です。

耳学問を寄せ集めますと、中国で商の王朝が周に亡ぼされる時、王族は東へ逃れて朝鮮半島に新しい国を興したと言われますから、その文化が日本列島に及んでもおかしくない。周が東方を警戒して重臣の太公望を黄海に突き出した山東半島の斉に封じた歴史もありま

すし、その後に、戦国諸国を滅ぼした秦の始皇帝が東海にくわしい山東の徐福を派遣し、東方の神仙島に不老不死の仙薬を求めたと史書にあります。宋代の詩人が焚書された古典が日本にあるのでは、などと詩に詠んでいるのも当時の文化を空想するのに暗示的でしょう。歴史書である漢書そのものによれば、紀元前二世紀に漢の大帝国を築いた武帝が楽浪郡を設けると、倭の諸王が例年のように国使を送り献見したとあります。当時すでに中国の情報は日本列島に達すると共に、列島にはそれに反応する文化と経済を持つ社会が成立していた訳です。

さて、これに相当する都市的な集落の遺構ですが、戦前から知られているのは奈良盆地の中央にある唐古鍵遺跡でありまして、有名な吉野ヶ里弥生遺跡が登場するまで半世紀近くも弥生時代の最大遺跡とされていました。近年になって世間に注目されるのは楼閣建築の描かれた土器が発見された以降ですが、集落は大和川水系に近く四重のカナールをめぐらし、東の方に日本最古の三輪神社がご神体としている三輪山を仰ぐ所にあたります。

当時、大陸との交流は半島から海峡あるいは山東や江南から黄海をわたり九州へ、それから瀬戸内海をたどり明石海峡を越えて大阪湾の沿岸へ到達したのでしょう。さらに淀川河口に当たる水郷から大和川をたどると、信貴山・二上山の間を通り大和平野に着きます。大和川は平野西端の斑鳩付近で竜田川、佐保川、飛鳥川などにわかれるのですが、一帯は

近世まで沼沢が多く、今も河合と言う地名が残り神社があるところです。当時も舟運の便があったと思われますが、そのターミナルになったのが唐古の遺跡ではないか。と考えますと舟運の目標になったか舟運の出入りを監視したのか、この集落をいとなむ人達が楼閣に関心を持ったであろう唐古の様子も想像されます。

遺跡には掘立柱建築が多く出土していますが竪穴住居は殆どありませんので、環濠内は住居の少ない業務団地のようなものではないか。実は二〇〇四年に直径八〇センチの掘立柱跡が発見されましたが、今後の調査によって巨大建造物の存在が確認されると、それをめぐり集落のイメージが一変するかもしれない有様です。

遺跡は三輪山の麓へ向けて堀をこえる関所のような遺構があり、これから箸墓など初期の古墳が分布している三輪山の裾にかけては大規模な集落が成立。その建築物などのなかには礎石をもった建造物跡があると報告されていますから、楼閣のような荷重がかかる建築もあった可能性をもつ都市的な集落、いわゆる八十巷（やそのちまた）がひろがったか。その都市のランドマークとして三輪山が位置付けられ、アーバンデザインとも言うべきものが成立したか。

大和平野にとって太陽が昇る山として三輪山が崇拝され神社が建立されたのは、当時の信仰の文化が、三内丸山の場合も見られた自然崇拝を基調にした可能性を思わせます。紀元四世紀の初頭前後に成立したと日本書紀から考えられる三輪王朝が、先ず太陽神を三輪

山麓に祀り、山の東に日の出の地を求めて伊勢の海辺に至った可能性について、これからの調査から得られる知見も期待されます。

三内丸山・唐古鍵とも巨大な建築がある可能性を申しましたが、大和よりも大陸文化との交流が容易な大阪湾岸について見ますと、和泉府中の曽根池上遺跡に建築面積が百坪余の高床建築が復元されております。一世紀前後のものであろうと考えられていますが、この建築は南面中央に直径二メートル余りの大井戸と接し、これを取り囲んで広場が造成され、さらに周囲には縦横の列状に配置された掘立柱の建築群も出土中。この宮殿群こそ紀元一世紀に漢の光武帝へ国使として太夫を送った大王の都宮では？　という試論もされるところです。当時の大阪湾は現在よりも海岸線が和泉の内陸に入っていまして、この遺跡も海岸に接した港であった可能性がある。この曽根池上遺跡を支配した当時の王は、水運により日本列島に支配網を拡げていたとも思われますし、いわゆる邪馬台国畿内説によりますとここが卑弥呼の港都ではなかったかとも言われます。

その邪馬台国は九州の佐賀に吉野ヶ里遺跡の発見で脚光を浴びて二〇年ほど。魏志東夷条倭人伝には邪馬台国につきましても宮室・楼観・城柵厳の字が並びますから、宮殿・望楼・城柵が厳然とした景観の印象を魏使に与えたのでしょう。ご存知のように魏は蜀軍をひきいる孔明が五丈原に歿すると兵を返し遼東から半島を制圧、そして翌年は倭から親魏

図 2　吉野ヶ里遺跡（佐賀県）

紀元前から紀元 3 ～ 4 世紀に至る弥生時代集落中央，台地上に望楼と城柵，左の台地下に高倉・広場などが整備されている。写真の南内郭から後方に北内郭があり，重層の宮殿風建築物が復元された。

使節が派遣され、また親魏女王の金印を届ける魏使の訪倭となります。この邪馬台が九州だったのか近畿だったのか論争は今も続いておりますが、日本列島に魏の文化を知る人が見ても威容が評価された都城は、明らかに三世紀前半までに成立していたわけです。

その中でも一〇年ばかり前、建坪三〇坪から四〇坪が多い高床建築の中に五〇坪の大建築が出土しまして、これこそ吉野ヶ里遺跡を支配した王の宮殿であろう、という想定を加えて今の吉野ヶ里国営公園が整備されて

おります。三内丸山の場合と同様に基本計画の構想委員として何度も現地へ参りましたが、遺跡発見当初、考古学者（佐原真、文化庁技官故人）が佐賀平野を見渡す岡の上に連なる建築跡などを見て「倭人伝にある都城の風景を実見できたのは生涯の感動だ」と述べておられたランドスケープは今後も検討が必要です。

古墳時代日本のランドスケープ

その後、四世紀から五世紀にかけまして日本の歴史、特に大陸との交流、は半島の好太王碑や石上神宮の七支刀といった金石文、あるいは中国南朝の倭五王に関する記述などの他に知られておりません。中国史では魏を継承した晋が呉を滅ぼし、天下を統一しながら四世紀には南北朝の分裂時代に入ります。倭は半島の百済と結び高句麗と戦い、同時に南朝との交流を通じて文化を学習し、特にランドスケープの領域に関して注目されるものがありました。十数年前、たまたま奈良の国立文化財研究所にいた後輩の牛川喜幸氏（文化庁技官、京大造園昭和三四年卒）を訪ねましたら「三重県の教育委員会から連絡があり、伊賀神戸に近い城ノ越の農地で農道整備のために事前調査をしたら、紀元四世紀までさかのぼる木馬や木刀の遺物が出土。その下から水路のようなものが発見されたと聞いて調査中だが、一見の価値はある」との話。四世紀とは当時の南朝が都とした江南の紹興で王義

之が「蘭亭序」を書し、曲水の宴を描写した時代でもあり、数日後に時間を作って電車を乗り継ぎ現地（近鉄伊賀線、比土駅より徒歩）へ参りました。

発掘調査のために何十人もの人海戦術がくりひろげられている中に入ると、下流では幅員五メートルもある水路は両岸が玉石敷になっていて、第一印象は京都御所にある遣水（やりみず）そっくり。遺物の採取が優先したものですから、そのために除去された玉石が沢山ありまして、本来は玉石敷の遣水だったかも知れない風景。水路は自然湧水の泉を水源にして平安時代の作庭記に見える泉の造作をイメージさせましたし、水路が合流するところには景石の立石も見られました。先に吉野ヶ里の遺跡が発見された時に考古学の先生が感激されたと申しましたが、この

時は私が驚かされました。東西延べ五〇メートル近い遣水は作庭記にある「大河ノ様（おおかわのよう）」のデザインそのものではないか。それまで日本最古の庭園と言うのは明日香村の島の庄（しまのしょう）に出土した方池、「蘇我馬子の島池と考えられている七世紀初頭のもの」とされていたのが三百年ばかりさかのぼるという発見ではないか。二一世紀に入ってから中国の広州に紀元前後の玉石敷水路が曲流する庭園が発見された例もあり、その日よりも翌日、さらに翌々日と気分が高まった記憶があります。

現在は発掘時の状態が見られるように護岸をコンクリート・アスファルトで固める工事

図3　城の越遺跡（三重県）

紀元4世紀前後の流水苑地遺構（上流部）本流（中央）と上部支流（手前）の合流地点，傾斜転倒した立石が多いが，修景の有様はうかがえる。またアスファルト施工のため風致に乏しいが，上方の人物により苑地の規模は想定できる。

がなされ、とにかく三個所の泉から流れて合流して行く遣水の風景は見られますが、かなり想像を働かせないと本来の風致を感じにくいのが実情でありましょう。しかし何れにしても中国が南北朝の時代を迎えて間もない頃、日本の自然環境に調和する流水の苑がデザインされた事実は特筆されます。

このようなデザインがなされた背景については農業の盛大につれて、農地への利水を考えて水神を信仰し

豊作を祈る、したがって立石などが出土した辺りでは祭祀を司る人がセレモニーとして流水によって身を清める。あるいは供物として木馬を捧げ、木刀によって邪気を払うなどの風景も想像されます。中国では春秋の昔に老子が道教を説いて自然信仰の体系化をはかったと聞きますが、その流れにのって漢の時代には陰陽道などが成立、その祭礼に潔斎のための禊(みそぎ)が水辺の聖地を求めて行われ、その儀式が南北朝の頃には曲水の遊宴にも変化したと聞きます。倭人伝には卑弥呼が漢・魏の反体制活動であった鬼道に通じていたとか。その文化が日本列島に伝わって来て古来の自然崇拝と習合し人々の民心を集め、それが邪馬台の諸国統合に力となったのかもしれません。

なお伊賀神戸は伊賀上野に連なる盆地にあって、南大和と伊勢を三輪山の裾を通ってつなぐ道筋に当たります。この街道は東に進むと伊勢との国境に当たる鈴鹿を越す青山峠になりますが、古墳時代には阿保氏が大和政権の傘下にあって周辺を支配していたとあります。陰陽五行説で東方を青龍によって象徴した歴史を思いますと、その暗合も考えられますが、この流水の苑は東国との結界に当たる地にしつらえられた斎場とも見えます。

日本書紀によれば、紀元五世紀末に皇宮の後苑で曲水の宴が行われたとありますが、この流水園地は曲水の庭園が作庭される技術的な可能性として当時の土木技術ないしランドスケープ・デザインの水準を示唆すると思われます。加えて言えば、泉の湧水をテーマと

して立石を配する象徴的な自然風景式庭園のデザインは、以後の遣水を主景とする日本庭園の伝統として作庭記にも記されていますが、造園史上、世界に類例の少ない様式をとどめる最古の事例であると存じます。

この時代を町づくりの上から眺めますと、いわゆる河内王朝が大阪の上町台地に都城を経営した当時です。倭の五王が日本書紀の雄略天皇になぞらえられている倭王武に至るまで、南朝に国使を送り文物を求めた歴史を思えば、その都城は海外から訪れる人の目にも吉野ヶ里の先例をこす印象を与えるべく整備されたでしょう。事実、上町の難波宮跡の発掘により十六棟の高倉が八棟二列の配列によって出土し、人目を驚かせたのは十数年前の話でした。今後の調査により、平城時代や飛鳥時代の難波宮の下方から五世紀以前の宮殿や町並みが庭園と共に出土し、日本の古代史を町づくりの面から一新する可能性も否定されません。その風景が如何なるものか予断を許しませんが、古墳時代には古墳自体の造型と景観へのインパクトは言うまでもなく、その配置が各地のランドマークを意識した軸線を持つなども、町づくりのデザインに暗示的かと思います。

何れにしても紀元三世紀に始まると言われだした古墳時代は、日本社会が巨大な土木構築物を構築する技術をマスターすると同時に、大和に拠点をおいた政治体制が関東から西国までを統治する機構を成立させた時代です。そして四世紀から五世紀にかけては半島や

江南と密接な交流を持ち、漢帝国の下に成熟した文化を吸収し、あわよくば半島にも支配的な地位を得ようとするだけの国力を蓄えていました。

その首都であった有力な候補と思われる南大和と和泉・河内の都城は、三輪山の山麓や上町台地にどのような風景を展開したか。それは相互に密接な関係を持つものだったとは容易に想像できますが、何れが首都であり、副都であったかはともかく、上町台地の上に南北軸をもって展開したであろう港都の風景と共に当時の町づくりランドスケープを考えるのは我々の夢であります。

前白鳳日本を中心とするランドスケープ

飛鳥時代と言えば聖徳太子や蘇我馬子など六世紀末、あるいは仏教伝来と欽明天皇と言った六世紀中葉から後をイメージするかと思います。とすれば、先の雄略天皇から後に発生した大和朝廷の混乱を制圧した大王、継体天皇、の五世紀に始まる南大和を舞台とした治世の時代を如何に考えるのか、と言う問題は残るようです。しかし何れにしても仏教の伝来がもたらした新しい宇宙観、それを内包した新しい町づくりへの挑戦は画期的なもの。例えば、飛鳥の板葺宮（いたぶきのみや）と今も飛鳥大仏をとどめる飛鳥寺（あすかでら）が南北の軸線上に見られるなど、あるいは大和盆地を南北に縦貫する下ツ道の街道が、欽明天皇陵と考えられている見瀬丸（みせまる）

山古墳をランドマークとする南北軸に合致するなど。これまでの風土を重視したデザインに対し、別の秩序が導入され始めたと言う印象を与えます。

ただし、このような調査結果が果たして何程まで真実を明らかにし、時代のデザインを物語るのか。今までの話に三内丸山には高床建築の配置がありました。曽根池上には縦横の平面意匠が見出されつつあると言われます。この時代のそれは測量技術の拡大による南北軸の重視が、強調されるかも知れません。それは七世紀の新羅・唐による百済の占領が結果した百済遺民の大量渡来を背景に、大陸の土木技術が大津京の建設とか近江からスタートした条里の整備など。大陸の強大な唐王朝に対して身構えねばならなかった天智天皇や天武天皇・持統天皇などの朝廷が推進した富国強兵のため、農業を中心とした産業振興とも関係したでしょう。

白鳳文化は条里という高度な農業土木技術の結果であるとの指摘も聞きます。唐王朝が即天武后の治下にあった当時の大和は、藤原宮を中心に東西・南北とも二里四方（八キロメートル角）と言う巨大都市として藤原宮が構想され建設され始めていたと言われます。無論、従前の通説は南北一里で東西は半里ばかりと言われました。だから面積は一桁ほど異なって、唐の長安が一〇〇万人の人口を東西三里強・南北三里弱の百十余坊に収めたのに対し、面積でも半分にせまる大構想だったわけです。日本としては実力以上の大計画に

違いなく、もし実現しても平城宮の人口がピークで二〇万人と言われる歴史からすると、構想通りの都市は意味があったか。とは言うものの大和三山を取り入れて南大和一帯を占める都の風景は、ランドスケープ・デザインに関係する者には興味深いものがあります。

戦前の発掘調査によると藤原宮大極殿の東方には玉石敷の池庭があったと言われ、もしその通りだとすれば、優美な耳成山を水面に写す苑池をめぐって宮殿が並ぶ風景。それは万葉集に有名な「春の苑、紅にほふ桃の花、下照る道に、いでたつ乙女」の景を実感させるものではなかったか、と思われます。飛鳥時代の庭園につきましては、六世紀遺構として小規模ながら護岸の石組をもつ池と水路が検出された一方、石の舞台古墳の北西には水面が一辺四〇メートル前後の石積護岸方池が出土。この池に伴う水路にはデザインされた石組なども見られ、これが蘇我馬子の島宮（しまのみや）とすれば、紀元七世紀初頭、既に優れた作庭技術が成立していたと思われます。

先に遣水の庭園に連なる水路のデザインが四世紀までの近畿に成立していた、と申しましたが、更に新しい変化は六世紀に伝来したと言われる仏教、その周辺の文化によるところであろうと思います。例えば、スリランカを訪れた経験から申しますと、紀元前から一〇世紀にかけての寺院遺構で最も印象的だったのは沐浴のための方池でした。その造型が日本の庭園、生活環境の整備に直接の影響を与えたとは申せませんが、飛鳥の庭園遺構に

ついて見れば、苑池と水路が、宮殿周辺などから出土するのは、今までのところ紀元六世紀から後になるようです。

同じ飛鳥時代、百済からの渡来人に路子工の話があります。名前から見て土木分野に関係した人物ないし技能集団でしょう。その技能として須弥山・呉橋の建設が注目された訳ですが、仏教の教典にある須弥山の築山立石を造作すると共に苑内の水流に江南風の沢渡ないし架橋を施工して修景する。それらをトータルすると、築山立石から遣水を通して苑池へ、同時に庭園施設の整備あるいは植栽など、日本庭園のランドスケープ・デザインが従来の伝統に海外の技術を加え、その完成に向かって一歩を進めたようです。

その経過が六世紀から七世紀にかけて石の舞台に近い園池（島宮）、また七世紀中頃には飛鳥寺に近い飛鳥川河畔の落水立石をもった大苑池に、七世紀末には藤原宮の中にそれぞれ見出され、さらに八世紀に入ると平城京の左京三条には北宮庭園と言われる曲水園池が、また宮内の東院跡には池の上にテラスが架けられ楼閣が建築された池庭が成立する。この流れは八世紀末から九世紀の初めにかけ平安京の神泉苑や京外の嵯峨院へと発展し、さらに京内の河原院や洛南の鳥羽殿あるいは宇治の平等院などを営造。一一世紀に至って橘俊綱が記す『作庭記』により日本庭園文化の確立と展開して行くのですが、これは話が後世に過ぎますので、話題を飛鳥白鳳の町づくりにもどします。

飛鳥の都宮にあって南北軸を意識した町づくりの可能性にふれ、また藤原京について皇居を中心に壮大な構想があったとの新説を申しました。平城京については藤原京の西軸が耳成山西方の下ツ道となり、これが朱雀大路として奈良の中央軸になったのはご存知の通りです。朱雀大路については発掘中のところを実見しましたが、幅員は四〇丈（一二〇メートル）、排水のために中央に高みをもたせ、東と西の側溝は幅員が五メートルに前後する堀川という壮大な規模が見られました。これが平城京の二条から九条まで、延々と南北に三キロメートル以上も貫通し、北に朱雀門を南に羅城門をそばだてていたわけです。例えばパリのエトアールからルーブルへのシャンゼリゼ、または京都駅から京都御所までの烏丸通りのスケール、ただし烏丸通りの場合は道幅を三倍以上にイメージして下さい。

このような町づくりのモデルは長安城でした。現在の西安は明代（一四世紀）の復元であり、唐王朝皇宮にあたる東西四キロメートル、南北三キロメートル程度の規模を実体化した城壁なので平城京のイメージに相当。しかし、唐末に大雁塔などを除いて破壊された長安と比較すれば、東西が三分の一、南北が四分の一程度になります。一方、藤原京の構想が皇居を中心にしたのに対し、平城京では長安と同じく皇居を北端にして朱雀大路を中軸に町づくりが進められた背景について耳学問の成果を引用しておきます。漢・三国を経て中国の南北朝は漢代からの儒教・道教に加えて仏教が流行しました。いまさら唐詩の江

南行にある南朝四百八十寺と言う句を引用するまでもありませんが、それは中国古来の円天方地思想に立脚した世界観に新風を吹きこみ、伝統的な皇宮を中心とする町づくりに影響したとされています。南北朝に幕をひいた隋が、シルクロードからの伝来文化だった仏教に強く傾斜し、大同の仏教遺跡とも関係した北朝である歴史もあります。この新しい河北・山西から南下した勢力が江南地方の伝統的な都市文化に影響した。そのヒントは仏寺の例などに影響された天子南面執政の想念が都市のプランに投映された可能性でしょうか。

それが藤原京の造都中止に結びつくかは分かりませんが。従来は京域の西辺に当たるとされてきた下ツ道、先に仏教伝来の時代を統治した欽明天皇の陵と言われる見瀬丸山古墳をランドマークにする奈良盆地の南北軸、それが平城京の朱雀大路となったのは両京の関係に示唆的です。その意味からは当時の町づくりは、祖先崇拝のシンボルとしての古墳や自然崇拝のシンボルとしての山体にランドマークを意識して、自然崇拝・祖先崇拝の原理が環境整備の考えにあった。しかし一方には大陸から伝来した天文学の知識もデザインの原理に取り入れ、新しいランドスケープを生み出すという、内外の思想や学理の調和をはかる和様文化の方向が生まれた、と考えます。

他方、このような文化の流転を支えた社会は生産性の高い、条里基盤の農業を推進するため、農地の生産力を維持する有機肥料としては、農村脊山など草本植物や落葉などを積

極的に採取し堆肥としました。その結果により林地の有機物は収奪され土壌の保水力は低下し、林相は常緑樹が減少して落葉樹のウエイトが高くなります。また松のような耐乾性の陽樹を主木とする林地が優越するなど、いわゆる里山が農村、農地に接して拡がります。

里山と農村との共存関係につきましては集落に必要な燃料や建材が採取された一方、山林の下刈りなど撫育に必要な管理も行われ、今日も見られる美しい田園風景が形成されました。故奥田京大総長が農学部教授になられた頃、「日本の風景はこんなに美しいのに造園学講座がどうして必要なのだ」と言っておられたとかのエピソードもあります。

しかし平城京のような都市周辺では話が別になりまして、二〇万人の人口を支えようとすれば日常生活に必要な燃材だけでも年間に何万トン、それを生産するのに必要な山林は何千町歩という面積になります。加えて平城宮や南部七大寺などの建築については、直接の建築材こそ諸国から運ばれたようですが、例えば重くてこわれやすい瓦の生産をとりあげても、輸送の点からして奈良山などの近郊が生産地になったと思われます。そのため燃料として収奪される木材の量は深刻な森林保水力の破壊をもたらし、その結果は奈良に生活する人達の生活用水を生む水源に機能の低下を招いたでしょう。

そのように考えると八世紀を飾る平城京の「咲く花の匂ふが如き」風景は、光と共に陰としての不衛生な疫病の流行をも伴うタウンスケープ。河流に水の乏しい佐保川や秋篠川

に苦しんだ都市経営の行き着いたのは、鴨川や桂川の豊かな水に恵まれた山紫水明の京都盆地への遷都だったのです。

また平安京の造都に当たっては当時の環境調和構想とも言える四神相応の説がとりあげられ、鴨川を青龍に、山陰山陽道を白虎に、淀川・木津川の沼地などを朱雀に、山深い北山を玄武にそれぞれを考えたと言います。より具体的には南北軸の朱雀大路を船岡山と甘南備山を結ぶ今の千本通にとり、東西軸の一条大路を神楽岡と双ヶ岡の見通しに求めたとの俗説も耳にします。しかし、何よりも大切だったのは京都北山の森林を、比叡・鞍馬・貴船・雲ヶ畑などの社寺林として、保全した千年の歴史でした。

蘇我馬子が新思想文化とも言える仏教を国是とする新政を樹立、飛鳥の古京を造営してから桓武天皇の平安京まで約二百年。新しい町づくりは華麗な七大寺に象徴される文化を今に伝えます。しかし、大きな教訓は自然との環境調和を求める学習にあったと考えます。

おわりに　その一（日本列島を眺めて）

お話をとりまとめたいと思いますが、縄文時代と言う五千年余りも昔、文化も文明も日本列島に考えられないと言われた当時。北海道を対岸にする陸奥湾の奥、三内丸山の岡には交易と交流を基盤とする集落群が都市的な姿を見せる町づくりがありました。そこでは

中枢の祭祀集落を想像させるところに、巨大な六本柱構造物や建築群が秩序をもって整備されました。また両側に環状列石円墳が並ぶ広幅員の道路が人工の栗林中に建設され、そこにパノラマやヴィスタの配慮を思わせるランドスケープの意識もうかがえました。

三千年前、日本列島に水田米作が行われ始めてから弥生文化が進みますと、畿内には二千年以上も昔に大建築ができて都城が整備され始めた様子を大和の唐古鍵や和泉の曽根池上に見られるようになります。すでに漢の樂浪と交流があった倭は、紀元一世紀に洛陽の光武帝に国使として太夫を送り、漢倭奴王の金印が授与されたと思わせる史書もあります。超大国であった漢との国交を維持する倭の国力は相当な水準にあって、その都もまた倭を訪れる使節の目に印象的だったと中国の史書（漢書）にあります。

弥生時代の都市遺跡として有名なのは、九州の吉野ヶ里ですが倭人伝にある邪馬台の宮室・楼観・城柵厳の表現は三世紀とは言え、漢への献見を重ねて国交を続けた倭の宮都は和泉の高殿からも威容が想像されます。畿内に見ると、大和の遺跡群は未だ解明に遠い段階ですが、大和青垣の中にも秀麗な三輪山をランドマークに仰ぎながら、その山麓に展開したであろう集落の風景。それは列島の中枢としての声望を得るにふさわしいランドスケープ・デザインの町づくり。その整備で人心を感動させてこそ、「大和は国のまほろば、たたなずく青垣山、大和し麗し」の思いが人々の共感をさそい、数々の古墳に祖霊を祀り

ながら自然の風光を基盤とする都が成立したと考えられます。

弥生時代から古墳時代の文化や仏教伝来後の文化についての話では、伊賀神戸に出土した流水の苑に見られるランドスケープから、飛鳥の池庭そして平城宮の園池などにふれ、町づくりの新風にも話を拡げました。平城宮など、壮大な都京建設が大陸の長安などをモデルにしたとは言え、「この風土環境に根ざした自然環境への深い思いが、それぞれの町づくりにも各地のランドマークにプランの基盤を求め、都市開発に自然との環境調和が意識されたのではないか」と申しました。恐らく日本列島の風土と自然との環境調和が都京建設に意識されたのではないか。日本列島の風土と自然に超越者の存在を感じ、自然崇拝を生活に生かし、よりどころとしていたであろう祖先達。彼等が自然を原理とする思想を水源山林の保全に取り入れた理想の町づくりは山紫水明の京都に展開し、これが千二百年にわたり大人口を養い続け都市経営の成功に結実した。そこにはランドスケープを基盤とした町づくりの教訓が今に示されると存じます。

おわりに　その二（近江の風景、近江八幡を中心に）

大和から東海北陸への途、近江の歴史に中核と考えられるのは、美濃の接点に近い多賀神社の存在です。その辺りは四世紀頃の日本武尊説話など、東国との交流や五世紀末の継

体天皇と北陸道・東山道との関係からも注目されます。事実、近江は表日本の淀川水系にありながら、関ヶ原を通じて美濃や尾張の東海地方へ通じ、今津からは裏日本の若狭へ、一方には木ノ本から山を越えて越前を通り北陸地方へ結ばれます。すなわち山陽・東海・山陰・北陸への情報発信と受信、それに物資の交易が可能という条件があります。天智天皇が大津京を開いた七世紀の英知は近世の織田信長に生かされ、坂本に明智光秀を、長浜に羽柴秀吉を配した政略は、毛利や上杉の動向を安土城にいながら補足し、天下布武の実現にレールを敷いたのでしょう。その中でも豊かな生産を持つ湖東の中心となった安土や近江八幡は、徳川時代から明治、大正に至るまで、琵琶湖の水運にも恵まれた東西の要(かなめ)でした。近江商人の活躍を支える取引と流通の町が発展し、その経済社会の上に町の文化成熟があったようです。先に申しましたが、ハード、ソフトの両面に及ぶ良き町づくりは、魅力的なイメージを如何にデザインするかが鍵になります。

近江八幡の京街道にある町屋の中をみますと、奥の間に接する庭園には八幡の山を風景に取り入れ、生活を楽しみながら魅力ある人々の交流が生まれる雰囲気を考えさせられました。この町屋庭園の文化は、このようなソフトな意味でも、町づくりの基盤になります。事実、都市化の進行は生活環境の整備について問題を与えますが、実は生活環境の良い都市こそ発展が望めるというのが二一世紀の町のありかたと思います。

近江八幡の場合、その一つは朝鮮通信使が往来した京街道の風景でしょうし、もう一つは長命寺の麓へ連なる琵琶湖からの堀と水辺の風景。それを生かし他の町にはない良さを将来へ向けて、継承し発展させる、近江八幡独自のデザインが求められます。ヨーロッパで言えば、オーストリアのザルツブルグやベルギーのブルージュが思われまして、町のランドマークになる岡や商都の歴史を象徴する運河を町のプライド、町の魅力を代表とするものとして、真の観光に生かしたいと思います。水辺を生かした町には中国の蘇州ですとか紹興ですとか、クリークと一帯の町づくりも有名です。それらに勝るとも劣らぬ緑と水に恵まれた近江八幡の場合、その両者を生かす町づくり自体がランドスケープを生かす町の独自な文化であるべきでしょう

それは単にノスタルジックな町づくりではありません。二〇世紀の都市計画が能率的な生産機能の向上をテーマに発展したのに対して、二一世紀のそれは快適な市民生活の場としての都市です。それは若い日を育った思い出の町として誇れる町であり、身も心も安らげ文化がかおる、地球に一つしかない町として、いわゆるアイデンティティがある町づくりでもあるでしょう。

それでこそ日本文化の基盤にあるランドスケープ、独自の風土、に結びつく町づくりのデザインであり、経済的成功の面ばかり注目されがちな日本社会が、文化において多くの

ものを持っていると言う主張になるでしょう。そして大切な事実は人類の宝とも言うべき文化の豊かな町こそ、多くの暴力に対して安全な町である思想が、第二次世界大戦下のパリやローマ、あるいは京都によって証明された歴史だと思います。文化によって価値を認められ尊敬される都市は国際社会から認められる安全な場です。やがては、日本の全ての町が人類社会の中にあって文化の尺度から高い評価を受けて欲しい。その必要条件として風土を生かしたランドスケープ・デザインの観点から町づくりを見る、縄文・弥生の昔から日本文化の中にあった、そして今でもある筈の英知、を生かした町づくりが今日そして将来の課題ではないのか。近江八幡に、或いは近江の町々にそのステップを踏んで欲しいと言う思い入れで話をしめくくらせて頂きます。

（奈良女子大学名誉教授）